道徳基盤理論から見る道徳的社会化
親の叱り場面に着目した予備的検討

眞田英弥（東京大学大学院教育学研究科），丹亮人（東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会 DC1）

Moral socialization from the perspective of Moral Foundations Theory
A preliminary study focusing on the scolding situations

Hideya Sanada and Yoshito Tan

Author's Note

Hideya Sanada and Yoshito Tan are Ph.D. students of the Graduate School of Education, The University of Tokyo.

Yoshito Tan is a research fellowship for young scientists, the Japan Society for the Promotion of Science.

Abstract

Morality is different from person to person. Moral Foundations Theory (MFT) tries to explain this diversity, and this theoretical tradition has made research on adult morality flourish. However, although MFT has some developmental claims, empirical research on development is scarce. Particularly, parental socialization practices about diverse morality are rare. In this paper, to examine these developmental concerns, we examine the relationship between parental discipline and parents' morality based on MFT. We asked 226 parents raising children in the third year of kindergarten to see the hypothetical situations in which their children violate MFT's 6 moral dimensions. The participants answered how strongly they would scold, what they would say, and how they would explain why they scolded in this situation. The participants also answered Moral Foundations Questionnaire2 (Atari et al., 2022) which measures 6 moral dimensions based on MFT, Parenting Style Scale (Okubo et al., 2022) and demographics. Open-ended questions were used to check the validity of the stories. The results confirmed a certain degree of validity except for the Authority violation story. Concerning how strongly they would scold, results mostly did not show significantly large correlation coefficient estimates between MFT's moral dimensions and the extent to which parents scold their children for violations of their corresponding moral dimensions. However, exploratory analyses indicated that scores of some parenting style factors were significantly correlated to the intensity of scolding in different stories. Finally, we conclude the results and discuss some limitations and the scope for future research.

Keywords: Moral Foundations Theory, Moral Socialization, Discipline, Parenting Style, Scolding
キーワード：道徳基盤理論，道徳的社会化，しつけ，養育スタイル，叱り

道徳基盤理論から見る道徳的社会化

親の叱り場面に着目した予備的検討

1　はじめに

あなたが道徳として重視することと，私が道徳として重視することは異なるかもしれない。それは，Kohlberg（1969）が見出したように，発達段階の問題なのだろうか。あるいは，Kohlberg 以降で最も著名な道徳性の理論である道徳基盤理論（Graham et al., 2013; Haidt, 2012 高橋訳 2014）が想定するように，道徳として重視することの個人差の問題なのだろうか。本研究では，後者の視点に立ったうえで，道徳性の個人差が生じるメカニズムの一因として，親による道徳的社会化に着目し，予備的な検討を試みるものである。

道徳性は，従来，Kohlberg（1969）がそうであったように，正義に関するものとして捉えられたり，Gilligan（1982）の言うように，ケア，権利に関するものとして捉えられたりするものであった。しかし，Fiske（1991）や Shweder et al.（1997）をはじめとして，階層関係といったともすれば道徳的に低位に位置づけられる，あるいは道徳と捉えられないことの多いものを，その他の道徳と同列に位置付けるアプローチもまた存在してきた。道徳基盤理論（Graham et al., 2013; Haidt, 2012 高橋訳 2014）は，後者のアプローチの系譜にあり，そうした系譜に位置づくものとして，道徳性を広く捉えてきた。近年では，この理論は，道徳性を 6 つのカテゴリーに分類している（Atari et al., 2022）。曰く，身体的，精神的な危害を避けることに関する Care，平等な扱いに関する Equality，功績に応じて報われるという扱いに関する Proportionality，内集団との協調，外集団との競争に関する Loyalty，権威と伝統に関する Authority，身体的，精神的な穢れに関する Purity の 6 つである。例えば，誰かを殴ることは Care の違反として捉えられようが，目上の人に挨拶をしないことは Authority の違反として捉えられるだろう。

しかし，こうした道徳性のカテゴリーがあるとしても，それは各個人にとって必ずしも同列の重みをもつものではない。例えば，目上の人に挨拶をしないことをどの程度問題視するかには，大いに個人差が見られ得るだろう。ではどのようにしてその個人差は生じるのであろうか。Haidt（2012 高橋訳 2014）は，McAdams & Pals（2006）の議論に依拠しながら，以下のように議論している。すなわち，遺伝の影響の強い気質（気質特性，dispositional traits）に導かれながら，環境に適応していく中で身に付けられ（特有適応，characteristic adaptations），さらには自身の人生を意味づける統合的ライフナラティブ（integrative life narratives）によって生じるのである。これら 3 つのレベルのそれぞれで個人差が生じ得るし，実際，特有適応の個人差は道徳基盤尺度を用いた研究（e.g., Graham et al., 2011）によって，統合的ライフナラティブについてはライフストーリーを用いた研究（e.g., McAdams et al., 2008）によって示されている。しかしながら，個人差が生じる経路，発達に関しては，管見の限り十分な知見が見られない。さらには，環境側の要因に関してはさらに検討が不十分である。しかし，道徳基盤理論の外に目を向ければ，環境側，特に保護者による影響を中核に据えたものは，社会化，殊に道徳的社会化（moral socialization）と呼ばれ研究されてきた（e.

g., Brody & Shaffer, 1982)。そこで，本研究では，道徳基盤理論の視座から道徳的社会化を捉えることとする。より具体的には，ある道徳性を重視する人は，その道徳性にかかわる道徳違反に対して，そうでない人よりも強く叱るのかというリサーチクエスチョンを設定し検証することとする。すなわち，Care を重視する人は，Care にかかわる道徳違反に対して，Care を重視しない人よりも強く叱るのかということである。本研究では，このリサーチクエスチョンを検証することを主たる目的とする。

2　方法

2.1　研究参加者

研究参加者は，クラウドソーシングサービスであるクラウドワークスを用いて募集された 239 名である（女性 137 名，男性 101 名，回答しない 1 名，M_{age}＝38. 15，SD_{age}＝6. 26）。募集の際には，20 歳以上で年長（5〜6 歳）の子どもを持つ保護者であることを主要な参加条件として示した。このうち，回答に問題のあった 13 名を除外し，最終的に 226 名のデータを分析に用いた（女性 128 名，男性 97 名，回答しない 1 名，M_{age}＝38. 16，SD_{age}＝6. 14）[(1)]。

職業は，正規社員が 96 名，専業主婦・専業主夫が 56 名，パート・アルバイトが 31 名，自営業・自由業者・家業手伝いが 27 名，非正規社員・臨時社員・契約社員・嘱託社員が 14 名，その他が 2 名であった。最終学歴は，小学校・中学校が 3 名，高等学校が 42 名，専門学校・専修学校・各種学校が 30 名，短期大学・高等専門学校が 14 名，大学が 132 名，大学院が 4 名，その他が 1 名であった。子どもの年齢は，5 歳 110 名，6 歳 116 名であった。子どもの性別は，女の子 107 名，男の子 118 名，回答しない 1 名であった。

2.2　質問紙

道徳基盤尺度 2　道徳性を測定する尺度として，道徳基盤尺度 2 を用いた（Atari et al., 2022）。道徳基盤尺度 2 は，道徳基盤理論に基づく道徳性のカテゴリーを測定しようとするものであり，各道徳的見解（例：「つらい経験をした人々への思いやりは重要な美徳だ」）が，各人の意見と一致している程度によってそれらを測定しようとする尺度である。道徳基盤尺度 2 は，Care, Equality, Proportionality, Loyalty, Authority, Purity の 6 つの因子から成る 36 項目の尺度であり，「まったくあてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの 5 件法で尋ねた。

ただし，道徳基盤尺度 2 は，Atari et al.（2022）が作成したものであり，日本語版に関してはまだ十分な妥当性検証がなされていないという課題がある。しかし，道徳基盤理論の最新の定義に基づく日本語の尺度は道徳基盤尺度 2 しか存在しないため，本研究では道徳基盤尺度 2 を用いた。

養育スタイル尺度　道徳的社会化においては，養育スタイルとの関連が指摘されている（e. g., Brody & Shaffer, 1982）。そこで，養育スタイルを測定する尺度として，養育スタイル尺度日本語版（Okubo et al., 2022）を用いた。養育スタイル尺度は，ポジティブな養育に関わる Warmth，攻撃的，ネガティブな情動が絡む養育に関わる因子である Hostility，子どもに甘い養育に関わる因子である Permissive，厳しい養育に関わる因子である Harsh control の 4 因子から成る。各項目は，普段の接し方が，ある接し方（例：「時間があるときは，子どもと一緒に遊ぶようにしている。」）とどの程度あてはまるかを

尋ねるもので,「まったくあてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの 6 件法で尋ねた。

子どもの道徳侵害ストーリー　道徳基盤理論の 6 つのカテゴリーの道徳性に従って，そのカテゴリーの道徳を典型的に侵害する道徳侵害ストーリーを作成した。ここでは，例示のために Care の侵害として作成したストーリーを示す（Care 以外のストーリーは附録を参照のこと）。

Care が中核的な問題となるストーリー

あなたのお子さんが，あなたと一緒に公園へ行った時のことです。同い年のお友達と滑り台で遊び始めたとき，先に滑り降りようとしたお友達が,怖がって止まってしまいました。あなたのお子さんは，お友達に「早く滑って！」と怒ってしまいました。

上記ストーリーは,「早く滑って！」と怒ることが，友人への精神的危害になることを意図して作成されたものである。このように，各カテゴリーの道徳を侵害するストーリーを呈示した。

これらのストーリーに対し,「あなたは，お子さんの行動について，この時，あるいは少し時間がたってから，お子さんを叱りますか（さとすなど，言葉をかける行為は「叱る」に含まれると考えてください)。」という教示を示し,「全く叱らない」から「強く叱る」までの 5 件法で回答を求めた。

上記質問で「全く叱らない」を選択した人には,「なぜ叱らないのかについて，理由をご回答ください。」という教示を示し，叱らない理由を尋ねた。ただし,「全く叱らない」を選択したのは，最大でも Authority の 12 件であり，分析のための十分なサンプルを確保できなかったため，自由記述の分析は実施していない。

一方で,「全く叱らない」以外を選択した人に対しては,「あなたは，この時，あるいは少し時間がたってから，お子さんにどのような言葉をかけますか。普段あなたが自分のお子さんにどのような言葉をかけているか，できる限り具体的にイメージしてご回答ください。」という教示を示し，どのような言葉かけをしているかを尋ねた（以下，言葉かけ)。加えて，言葉かけは「ダメでしょ」のようになぜ叱るのかが不明瞭なままである可能性があったため,「お子さんに言葉をかけた後,『なんでダメなの』と聞かれたら，どのように説明しますか。先ほどのご回答と被っていても大丈夫ですので，できる限り具体的にイメージしてご回答ください。」という教示を示し，子どもに理由を示しながら行う言葉かけのありようも尋ねた(以下,理由づけ)。

各ストーリーの「全く叱らない」以外を選択した（言葉かけ，理由づけについて回答した）人数は，Care が 219 名，Equality が 224 名，Proportionality が 216 名，Loyalty が 223 名，Authority が 214 名，Purity が 223 名であった。

2.3　手続き

研究参加者は，クラウドソーシングサービスであるクラウドワークスに掲載された募集文を読んだ後，調査に参加するためのリンクから，Qualtrics にて作成されたアンケートに回答を行った。研究は，インフォームド・コンセントを取得した後，デモグラフィック情報を尋ねる部分までは全員共通の手順で進められた。その後も，尋ねている項目は共通であるが，尺度，

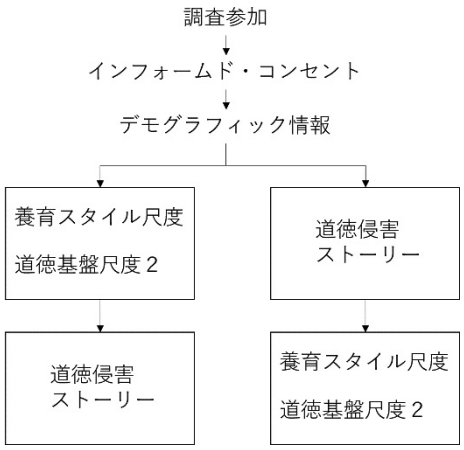

図１：手続きの図

実験課題の呈示順序については，図１のような形でランダム化を行った。すなわち，（1）尺度を呈示するブロックと道徳侵害ストーリーを呈示するブロックの呈示順をランダムにしたうえで，（2）ブロック内で，尺度を呈示する順番，道徳侵害ストーリーを呈示する順番をランダムにした。さらに，（3）尺度に関しては，項目をランダムに呈示した。

3　結果と考察

分析においては，ESEM に関しては Mplus（Muthén & Muthén, 1998-2017）を，それ以外については R4. 2. 1（R Core Team, 2022）を利用した。

3. 1　各尺度の因子構造および信頼性の検討

道徳基盤尺度２は，妥当性が十分に検討されていないため，まずは因子構造を検討する。Atari et al.（2022）と同様に，Exploratory Structural Equation Modeling（ESEM: Asparouhov & Muthén, 2009; van Zyl & Ten Klooster, 2022）を用いた。ESEM は，探索的因子分析と確認的因子分析の要素を合わせ持つ方法であり，通常の確認的因子分析では，１つの因子からそのほかの因子に属する項目に対する因子負荷が０に固定されているが，ESEM ではこの制約をなくし，可能な限りこれらが０に近い値になるように推定する方法である。最尤法，ターゲットローテーションによる ESEM を実施したところ，CFI＝. 931，TLI＝. 899，RMSEA＝. 047，SRMR＝. 034 であり，十分な適合度を示した。因子負荷を表１に示す[(2)]。Care，Equality，Proportionality は概ね想定通りに測定できている一方で，Loyalty，Authority，Purity については想定とは異なる結果であった。そのため，これらには上付き文字で※を付し，定義と異なることを表すこととした。Loyalty※に関しては，国家に関する項目（loyalty 1，4，5，6）と Authority の項目の一部が特に因子負荷が大きく，必ずしも Loyalty を示しているとは言えない結果となった。Authority※に関しては，Authority の中でも権威や伝統を尊重すること（authority 1，3，4）が選ばれ，親に従う，年長者から学ぶ，強いリーダーを持つといった具体的な項目（authority 2，5，6）が選ばれておらず，抽象的な意味での Authority を測定できていると言えるかもしれない。ただし，Proportionality の中でも不正を働く人が捕まって処罰を受けるとすっきりするといった項目が負の因子負荷を有していることには注意が必要である。最後に，Purity※に関しては，貞操観念，純潔に関する項目（purity 1，3）の因子負荷が大きく，Purity の中でも特に貞操観念に関する因子を測定していると考えられる。

以上より，因子構造に関しては，モデルのあてはまりは十分であった。また，Care，Equality，Proportionality に関しては一定程度の妥当性が認められた。Authority※に関しては，留意点は

表 1　MFQ2 の ESEM の因子負荷

	CARE	EQUALITY	PROPORTIONALITY	LOYALTY※	AUTHORITY※	PURITY※
care1	0.298	-0.003	0.037	0.278	-0.200	0.152
care2	**0.376**	**0.399**	0.065	0.045	-0.216	0.056
care3	**0.816**	-0.035	0.071	-0.075	0.056	0.027
care4	**0.744**	0.114	-0.115	0.055	-0.105	0.009
care5	**0.825**	-0.072	-0.002	-0.129	0.114	-0.038
care6	**0.762**	0.065	-0.040	-0.093	0.097	0.110
equality1	0.069	**0.984**	-0.023	-0.027	0.033	-0.004
equality2	0.067	**0.390**	-0.039	-0.031	0.216	0.128
equality3	0.179	**0.573**	-0.002	0.122	-0.081	0.029
equality4	-0.058	**1.014**	0.134	-0.137	-0.022	0.013
equality5	0.226	**0.458**	-0.150	0.071	-0.197	0.243
equality6	0.056	**0.927**	-0.039	0.044	0.112	-0.085
proportionality1	-0.005	0.022	**0.575**	0.304	**-0.439**	0.039
proportionality2	0.083	-0.145	**0.414**	0.193	0.073	0.115
proportionality3	0.036	-0.040	**0.577**	-0.113	0.136	0.222
proportionality4	0.097	-0.025	**0.363**	0.058	0.200	-0.014
proportionality5	-0.043	-0.027	**0.742**	-0.206	0.121	0.184
proportionality6	0.084	0.206	**0.507**	0.000	0.003	-0.047
loyalty1	-0.087	0.106	-0.032	**0.654**	0.315	0.024
loyalty2	0.233	-0.001	0.141	0.208	0.330	-0.110
loyalty3	-0.018	0.222	0.225	0.291	0.224	0.029
loyalty4	0.022	0.062	-0.029	**0.631**	0.127	0.202
loyalty5	0.261	-0.129	**0.554**	**0.362**	-0.025	-0.235
loyalty6	0.059	-0.071	-0.138	**0.528**	0.154	0.278
authority1	0.063	0.044	0.125	0.241	**0.386**	0.061
authority2	0.062	-0.071	0.247	**0.409**	0.045	-0.053
authority3	0.047	0.065	0.119	**0.360**	**0.371**	0.015
authority4	-0.041	0.076	0.008	0.174	**0.534**	0.219
authority5	-0.063	0.156	0.041	**0.362**	0.091	0.236
authority6	0.241	0.060	0.055	0.295	0.155	0.008
purity1	0.176	-0.133	0.142	0.109	0.062	**0.575**
purity2	0.238	0.131	0.051	0.160	0.186	0.221
purity3	0.050	0.137	0.142	-0.155	0.031	**0.820**
purity4	0.022	0.194	0.285	0.022	0.177	0.259
purity5	0.001	0.238	0.163	0.091	0.036	0.213
purity6	0.137	-0.064	0.321	0.178	-0.278	0.154

注：絶対値が0.35より大きいものを太字にしている

表 2　道徳侵害ストーリーにおけるコーディングの定義

Care	自他のネガティブな気持ちへの言及，危険／危害への言及（例，お腹が痛くなる，嫌な気持ちになる） ※自分が他人の立場だったらどう思うかを含む ※「ばい菌が体に入ってしまうから」のように，子どもが傷つくかどうかが不明瞭な発言は含まない
Equality	平等に使うことやみんなのものであることに関する言及（e.g., 順番，みんなのもの） ※交代で遊びなさいのようにルールとしての交代を強調する場合は該当するが、代わって、交代して、譲ってのようにその場で譲ることを促す声かけは含まない
Proportionality	何かをしているから何かをするということに関する言及（例，頑張っていないのでご褒美はもらえない，お友達が待っている）
Loyalty	協調への言及（例，約束を破ってはいけない，仲良くしなさい） ※「綺麗にしよう」のみのように手を洗う行動に言及しているのか汚さに言及しているかが不明な発言は含まない
Authority	敬意に対する言及（例，失礼） ※「きちんとしなさい」のように行動に言及しているのか敬意に言及しているのか不明な発言は含まない
Purity	汚さに関する発言（例，ばい菌，汚い） ※「綺麗にしよう」のみのように手を洗う行動に言及しているのか汚さに言及しているかが不明な発言は含まない

あるもののある程度の妥当性は見られる。しかし，Loyalty※，Purity※に関しては妥当ではないという結果であった。

続いて，道徳基盤尺度 2 の信頼性を検討するために，α 係数を算出した。その結果，Care（0.83），Equality（0.85），Proportionality（0.74），Loyalty（0.78），Authority（0.77），Purity（0.65）であり，Purity を除けば十分な信頼性を有していた。ただし，これらは ESEM とは確認しているものが異なる点に留意してほしい。

続いて，養育スタイル尺度の信頼性を検討するために，α 係数を算出した。その結果，Warmth（0.88），Hostility（0.85），Permissive（0.63），Harsh control（0.57）であり，Warmth，Hostility は十分な信頼性であったが，Permissive，Harsh control は低い値であった。Harsh control は，Okubo et al.（2022）の値と比較しても低い値であった。

以降の分析では，道徳基盤尺度 2 については，ESEM の結果に基づき，ESEM の因子得点を用いて分析を実施する。養育スタイル尺度については，各因子の平均点を用いて分析を実施する。

3.2　道徳侵害ストーリーのコーディングと妥当性の検証

道徳侵害ストーリーの妥当性を確かめるために，道徳侵害ストーリーに対する回答者の言葉かけ，理由づけをコーディングした。そのために，まずは道徳侵害ストーリーの回答を基にしながら，道徳基盤理論の定義を参考に，本調査におけるコーディングのための定義を第一著者が作成し，表 2 に示した。各ストーリーの言葉かけ，理由づけごとに，第二著者が全体の 10% 程度にあたる 24 回答ずつコーディングを実施

表 3　ストーリーごとの各コードの出現数

	コード					
	Care	Equality	Proportionality	Loyalty	Authority	Purity
ストーリー						
care（言葉）	**130**	12	0	10	0	0
care（理由）	**170**	9	3	14	0	0
equality（言葉）	20	**105**	40	6	0	0
equality（理由）	61	**139**	31	12	0	0
proportionality（言葉）	0	0	**176**	0	0	0
proportionality（理由）	6	0	**183**	1	0	0
loyalty（言葉）	38	0	85	**123**	0	0
loyalty（理由）	84	0	99	**136**	0	0
authority（言葉）	36	0	**53**	2	**53**	0
authority（理由）	88	0	**94**	0	92	0
purity（言葉）	65	0	0	1	4	**138**
purity（理由）	153	0	0	0	2	**192**

注：太字は各カテゴリーで最も出現しているカテゴリーを表す

し，一致率を算出した。その結果，authority を除けば，全て 80%程度以上の一致率が見られた。Authority のストーリーに関しては，authority，proportionality のコードが言葉かけ，理由づけの双方において 60%程度という低い値であったが，主たる原因としては，authority に「先生が一生懸命教えてくれているのに」といった場合に，先生が，という点を強調していると考え，authority の侵害とみなすか否かという点と，「一生懸命教えてくれるから，聞かないといけない」という点を proportionality の侵害とみなすか否かという点であった。協議の結果，これらを双方ともに侵害とみなすという点で一致し，コーディングを修正すると，一致率は 80%を超えた。そのほかの点についても，協議により同意したため，残りの箇所については第一著者が単独で実施した。

その結果，Authority のストーリーを除けば，言葉かけ，理由づけともに，想定していた道徳性に関するコードが最も多く出現しており，かつ半数以上出現しているため，一定程度の妥当性が見られたといえる。ただし，Authority に関しては，最も出現しているものに近い数が出現しているものの，出現数は全体の半数を超えておらず，十分な妥当性は確認できなかった。

3.3　叱る程度，道徳性，養育スタイルの相関

本調査で用いる得点間の相関を表 4 に示す。ストーリー間の相関は，Proportionality と Purity を除けば有意であったものの，0.3 程度で小さい値であった。本研究のリサーチクエスチョンは，「ある道徳性を重視する人は，その道徳性にかかわる道徳違反に対して，そうでない人より強く叱るのか」というものであった。相関に関しては，Care のストーリーにおいて，Care を重視している人ほど強く叱っているという傾向が見られたことを除けば，相関は見られなかった。一方で，養育スタイルと叱る程度に関しては，多くの項目で有意差が見られている。その中でも，予期していなかった傾向として，ストーリーに応じてどの養育スタイルが影響しているかが異なっていた。

表 4　叱る程度，道徳基盤尺度 2，養育スタイル尺度の相関表

	care (S)	equality (S)	proportionality (S)	loyalty (S)	authority (S)	purity (S)	care (Q)	equality (Q)	proportionality (Q)	loyalty※ (Q)	authority※ (Q)	purity※ (Q)	warmth	hostility	permissive
care（S）															
equality（S）	.35***														
proportionality（S）	.25***	.25***													
loyalty（S）	.35***	.32***	.35***												
authority（S）	.37***	.33***	.24***	.27***											
purity（S）	.23***	.21**	.07	.27***	.17*										
care（Q）	.14*	.24***	-.04	.13	.15*	.02									
equality（Q）	.04	.05	-.15*	-.11	-.02	.08	.49***								
proportionality（Q）	.18**	.19**	.03	.21**	.08	.13	.53***	.13							
loyalty※（Q）	.08	.15*	-.03	.03	.12	.18**	.38***	.23***	.47***						
authority※（Q）	.02	-.11	-.08	-.02	-.06	.12	.21**	.17**	.28***	.41***					
purity※（Q）	.14*	.07	-.07	-.07	.07	.05	.40***	.44***	.29***	.45***	.37***				
warmth	.16*	.22**	.02	.21**	.11	.16*	.29***	.00	.34***	.18**	.07	-.03			
hostility	-.03	.02	.17**	.21**	.08	.07	-.03	-.11	-.09	.01	.00	-.11	-.14*		
permissive	-.15*	-.27***	-.10	-.18**	-.14*	.01	.06	.13	-.07	.08	.14*	.14*	-.15*	.28***	
harsh control	.10	.25***	.11	.21**	.14*	.20**	.28***	.16*	.17**	.28***	.16*	.17*	.12	.32***	.04

注：（S)はストーリーにおける叱る程度の得点を指し，（Q）は道徳基盤尺度 2 の因子得点を指す

* p < .05, ** p < .01, *** p < .001

3.4　道徳性と叱る程度との関連の検討

上記相関で見た傾向が，養育スタイルを統制したうえでも変化しないかを検討する。道徳性のストーリーごとに，当該の道徳性を説明変数，養育スタイル，保護者と子どもの性別を統制変数とし，叱る程度を被説明変数とする重回帰分析を行った結果を表 5 に示す。

Care も含め，6 つのストーリーすべてで，当該の道徳性は有意でなく，自身の道徳性に応じてより強く叱るという関連は見られないという結果であった。

3.5　養育スタイルと叱る程度との予期せぬ関連の検討

一方で，相関で見られたように，元来統制変数として想定されていた養育スタイルに関しては，すべてのストーリーで有意な影響が見られた。ただし，そのパターンはストーリーごとに異なっていた。事後的かつ探索的にこの結果を解釈すると，まず Permissive は Purity を除くストーリーで有意な負の影響を与えており，子どもに対して甘い態度をとる保護者が，子どもをあまり叱らないという結果であった。Harsh control は Equality と Purity で有意な正の影響を与えていた。Harsh control の結果の解釈は困難であるが，Care と Proportionality に関して特に偏回帰係数が小さいことは注目に値する。Hostility に関しては，Proportionality と Loyalty で有意な正の影響を与えていた。後から子ども神輿の参加賞であるお菓子が欲しいと言って不機嫌になる Proportionality と，友達との約束の時間なのにアニメを見始める Loyalty は，いずれも保護者自身に迷惑のかかるストーリーであり，その点が Hostility の高さと関連している所以かもしれない。ピアノ教室で，目の前の先生に対して失礼な態度をとる Authority においても，同席している保護者からすれば恥ずかしいといった思いをすることが考えられ，これは偏回帰係数が 0.15 程度と一定程度の高さであり，そのほかのストーリーは低いことからも，本調

表 5　ストーリーごとの叱る程度の重回帰分析結果

	従属変数					
	Care	Equality	Proportionality	Loyalty	Authority	Purity
説明変数						
care	0.09(0.07)					
equality		0.04(0.05)				
proportionality			0.02(0.07)			
loyalty※				-0.02(0.07)		
authority※					-0.07(0.07)	
purity※						0.04(0.07)
warmth	0.17(0.11)	0.23(0.09)**	-0.00(0.11)	0.31(0.10)**	0.19(0.11)	0.20(0.10)*
hostility	0.03(0.08)	0.07(0.06)	0.19(0.07)*	0.27(0.07)***	0.15(0.08)	0.01(0.07)
harsh control	0.08(0.12)	0.30(0.10)**	0.07(0.12)	0.20(0.12)	0.15(0.12)	0.28(0.11)*
permissive	-0.24(0.10)*	-0.39(0.09)***	-0.23(0.10)*	-0.36(0.10)***	-0.28(0.11)**	0.01(0.10)
sex	0.01(0.13)	0.06(0.11)	-0.03(0.13)	-0.01(0.13)	0.17(0.13)	-0.19(0.12)
child sex	0.17(0.12)	0.13(0.10)	0.06(0.12)	0.08(0.12)	0.17(0.12)	0.15(0.12)
R^2	0.07(0.04)	0.18(0.15)	0.06(0.03)	0.16(0.14)	0.08(0.05)	0.08(0.05)

注：sexのレファレンスカテゴリーは女性であり，説明変数の（　）内は標準誤差，R^2の（　）内は調整済みR^2値を表す。　　* p < .05, ** p < .01, *** p < .001

査においてはその推察が裏付けられるものである。Warmth に関しては，Equality，Loyalty，Purity で有意な正の影響を与えていた。ただし，偏回帰係数が有意でこそないものの，Care では 0.17，Authority で 0.19 と，−0.00 の Proportionality を除けば全体的に一定程度の正の影響が見られた。Warmth が，Permissive のように甘やかすのではなく，子どもに対して温かみをもちながらも統制することを踏まえれば，理解可能な結果である。しかしながら，Proportionality においては偏回帰係数が−0.00 であり，なぜ影響が見られなかったのかについては今後の検討が必要である。

偏回帰係数に関しては以上のような結果が示されたものの，R^2に目を向ければ，Equality の 0.18，Loyalty の 0.16 以外は，いずれも 0.07 程度であり，全体的に分散説明率は小さい値を取っている。すなわち，養育スタイル，道徳性に還元されない要素が大きいことを意味しており，その他の要因も含めてより一層の検討が必要であろう。また，これらの結果はあくまで事後的に結果を解釈しているのみであり，その再現可能性には留意されねばならない。

4　総合考察

本研究では，道徳性を 6 つのカテゴリーから捉える道徳基盤理論（Atari et al., 2022; Haidt, 2012）に基づいて，どのような形で道徳的社会化が行われているのかを，子どもに対して叱る強さという観点に着目して検討した。その結果，道徳性の 6 つのカテゴリーを叱る強さは，当該の道徳性によって規定されるわけではないことが示された（e.g., Care のストーリーでは，Care を重視する人ほど強く叱るわけではない）。一方で，事後的な解釈にとどまるものの，ストーリーごとに，養育スタイルの次元の影響パターンが異なっていることが示された。したがって，保護者の道徳性にかかわらず，保護者

の養育スタイルが，道徳的社会化において重要な役割を果たしているのかもしれない。

しかしながら，このような結論を出すのは現段階では早急である。まず，本研究で用いた尺度の問題がある。本研究で用いた道徳基盤尺度 2 は，未だ日本において妥当性が十分に検討されておらず，日本において十分にあてはまるか不明瞭な点もある尺度である。特に, Loyalty※, Authority※，Purity※に関しては，ESEM の結果からも適切に測定できているとは考えづらく，より妥当な尺度を用いたうえで再検討する必要がある。

ストーリーの妥当性に関して，本研究では Authority を除けば一定程度の妥当性が確認されたものの，各道徳性につき 1 ストーリーであるため，各道徳性の範囲をカバーしているとは言い難い。したがって，本研究の結果が，道徳性の違いによるのではなく，今回のストーリーの特徴による可能性も否定できない。例えば，養育スタイルの影響は，道徳性それ自体ではなく，保護者に迷惑がかかっているか否かといった付帯的な要素の影響を受けている可能性がある。無論，そうだとしても，そのような付帯的に思われる要素が，実は各道徳性に典型的なものであり，結果として各道徳性に関する道徳的社会化を促している可能性も存在するため，この点も含めて今後検討していく必要があるだろう。

加えて，今回のストーリーは，多くの人が子どもを叱る場面を選んでいる。保護者の道徳性に応じて叱るか否かが分かれる場合などを検討すれば，異なる結果が得られるかもしれない。また，叱る程度ではなく，叱る内容において違いが見られる可能性もあるのかもしれない。さらに，今回は叱る場面に限定しているが，例えば列の割り込みをされた際に保護者自身がどのような反応を子どもの前で取るかなど，子どもにどのような振る舞いを見せるかといったことが影響している可能性も考えられる。そうした複数の経路についても検討される必要がある。

以上のような限界がありながらも，本研究では，道徳基盤理論から見る道徳的社会化について，今後の研究の端緒となる結果が得られた。今後は，本研究の知見を踏まえて，保護者の道徳性が, 子どもの道徳違反に対する叱り場面で, あるいは，子ども以外の道徳侵害に対する反応や養育スタイルを含めた日頃の振る舞いにおいて，どのように発露するのか，多面的に検討してゆきたい。

注

（1） 本調査では 240 名を募集したが，回答がデータ上に保存されていなかったのが 1 件であった。それ以外の 239 名のデータに対して，以下に述べる順に除外した。IP アドレスが同一であったため，複数回回答したことが強く疑われる回答が 5 件であった。続いて，不誠実な回答を確認する IMC 項目として，増田・坂上・森井（2019）を参考に,「大変失礼なお願いですが，文章を読んでいるか確認するため，この質問では少しあてはまると回答してください。」のような項目を作成した。この指示通りに回答しなかった回答が 6 件であった。子どもの年齢が 5 歳，6 歳でない対象外の回答が 2 件あった。

（2） 項目の掲載順は，Atari et al.（2022）に示している表と同様であるため，内容については同文献を参照してほしい。なお，本調査では道徳基盤尺度 2 は妥当な結果が得ら

れなかったが，今後筆者らが翻訳の修正，項目の追加，変更などを行って修正した道徳基盤尺度 2 を作成する予定である。そのため，妥当性の検証が不十分である尺度が，項目が掲載されることによってそのまま使用され，その後も複数のバージョンが共存してしまうことのないよう，本稿では項目を示さないこととした。

参考文献

Asparouhov, T. & Muthén, B. (2009). Exploratory Structural Equation Modeling. *Structural Equation Modeling: A Multidisciplinary Journal*, *16*(3), 397-438.

Atari, M., Haidt, J., Graham, J., Koleva, S., Stevens, S. T., & Dehghani, M. (2022). Morality beyond the weird: How the nomological network of morality varies across cultures. https://doi.org/10.31234/osf.io/q6c9r

Brody, G. H., & Shaffer, D. R. (1982). Contributions of parents and peers to children's moral socialization. *Developmental Review*, *2*(1), 31-75.

Fiske, A. P. (1991). *Structures of social life: The four elementary forms of human relations: Communal sharing, authority ranking, equality matching, market pricing*. New York: Free Press.

Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.

Graham, J., Haidt, J., Koleva, S., Motyl, M., Iyer, R., Wojcik, S. P., & Ditto, P. H. (2013). Moral foundations theory: The pragmatic validity of moral pluralism. *Advances in Experimental Social Psychology*, *47*, 55-130.

Graham, J., Nosek, B. A., Haidt, J., Iyer, R., Koleva, S., & Ditto, P. H. (2011). Mapping the moral domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, *101*(2), 366-385.

Haidt, J. (2012). *The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion*. New York: Pantheon.

（ハイト，J. 高橋 洋（訳）（2014）．社会はなぜ左と右にわかれるのか――対立を超えるための道徳心理学――　紀伊國屋書店）

Kohlberg, L. (1969). *Stage and sequence: The cognitive developmental approach to socialization*. In D. Goslin. (Ed.), *Handbook of Socialization Theory and Research* (pp. 347-480). Chicago: Rand McNally.

増田 真也・坂上 貴之・森井 真広（2019）．調査回答の質の向上のための方法の比較　心理学研究，*90*(5)，463-472.

McAdams, D. P., Albaugh, M., Farber, E., Daniels, J., Logan, R. L., & Olson, B. (2008). Family metaphors and moral intuitions: how conservatives and liberals narrate their lives. *Journal of Personality and Social Psychology*, *95*(4), 978-990.

McAdams, D. P., & Pals, J. L. (2006). A new Big Five: fundamental principles for an integrative science of personality. *American psychologist*, *61*(3), 204-217.

Muthén, L.K. & Muthén, B.O. (1998-2017). *Mplus User's Guide* (8th ed.). Los Angeles, CA.

Okubo, K., Tang, Y., Lee, J., Endo, T., & Nozawa, S. (2022). Development of the Japanese Parenting Style Scale and examination of its

validity and reliability. *Scientific Reports*, *12* (1), 18099.

R Core Team (2022). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. https://www.R-project.org/.

Shweder, R. A., Much, N. C., Mahapatra, M., & Park, L. (1997). The “big three” of morality (autonomy, community, divinity) and the “big three” explanations of suffering. In A. M. Brandt & P. Rozin (Eds.), *Morality and health* (pp. 119-169). New York: Routledge.

van Zyl, L. E., & Ten Klooster, P. M. (2022). Exploratory structural equation modeling: practical guidelines and tutorial with a convenient online tool for mplus. *Frontiers in Psychiatry*, *12*, 795672.

附録

Equality が中核的な問題となるストーリー

あなたのお子さんが，あなたと一緒に公園へ行った時のことです。あなたのお子さんは，公園で楽しくブランコに乗っていましたが，同い年のお友達がやってきて「ゆずって」と言いました。お友達が待っていても，あなたのお子さんは,「嫌だ」と言っていつまでも譲りませんでした。

Authority が中核的な問題となるストーリー

あなたのお子さんが，ピアノを弾きたいというので体験レッスンに参加することになりました。お子さんと一緒にレッスンに行ったところ，先生は分かりやすくレッスンしてくれましたが，お子さんはあまり楽しくなかったようで，先生を無視して不機嫌な態度を取ってしまいました。

Purity が中核的な問題となるストーリー

あなたのお子さんと一緒に，ピクニックに行った時のことです。公園に着くと，あなたはレジャーシートを敷きました。そうしてあなたが準備をしている間に，お子さんは，手が汚いまま，おにぎりを手で取りだして食べてしまいました。

Loyalty が中核的な問題となるストーリー

あなたのお子さんが，お友達と遊びに行く約束をしていた日のことです。家を出る直前になって，あなたのお子さんが，録画していたアニメを見だして，最後まで見ると言って動こうとしなくなってしまいました。

Proportionality が中核的な問題となるストーリー

あなたのお子さんが，町内会のお祭りに参加することになりました。子ども神輿に参加す

ればお菓子がもらえることになっていましたが，あなたのお子さんは嫌がって参加しませんでした。しかし,お菓子が配られ始めると,自分も欲しいと言って不機嫌になりました。